（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	聖隷放課後クラブはなえみ磐田			
○保護者評価実施期間	令和6年9月13日	～	令和6年9月30日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	80人	（回答者数）	７９人
○従業者評価実施期間	令和6年9月13日	～	令和6年9月30日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	10人	（回答者数）	10人
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年3月24日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもの特性を踏まえアセスメントと個別支援計画をチームで作成し、独自のツールや複数の職員による支援を通じて、こどもの支援の実態をクラス間で共有している。	担当職員もアセスメントに関わり、仮の計画を立案後、カンファレンスで共有しながら児童発達支援管理責任者と計画を作成し、アセスメント力を向上させている。また、複数の職員でこどもの見守り、特性把握に努めるとともに、法人内の合同事例検討会で職員間の意見交換の場を設けている。	今後の取り組みとして、事例検討会や合同勉強会を継続し、こどもを見る力を向上させていきたい。また、アセスメントツールを見直すことで、より精度の高い支援計画を作成していく。
2	活動プログラムは、5領域を基に年間計画を作成し、月案に落とし込んで実施している。リズム・運動・集団・製作の4つの活動に分け、週ごとに内容を変更しながら、スモールステップで課題に取り組むことで、段階的な能力の向上を支援している。	クラス会議で意見を共有し、内容を精査した上で児童のレベルに合わせた活動を企画している。必ず申し送りで前日の振り返りを行い、内容を改善する工夫も実施。更に、クラス内だけでなく他の職場の職員とも気兼ねなく相談できる環境があり、多様な意見を取り入れている。	今後は、複数の事業所と連携した勉強会で療育内容を共有し、支援ツールを活用してプログラムの幅を広げていく。また、昨年の活動内容を振り返り、こどもや保護者の希望を反映した企画立案を行う。
3	当施設内には、児童発達支援センター「かるみあ」、就労支援事業所「チャレンジ工房磐田」、相談支援事業所「磐田みなみ」など複数の事業が併設されている為、事業間の交流がはかりやすく、移行支援の円滑化や見通しを持った支援が可能となっている。	年に数回、児童発達支援センター「かるみあ」とのはなえみ体験会や交流会を実施。 就労移行支援B型「チャレンジ工房磐田」とは、パン作り体験や買い物練習の機会を設け、就労支援事業所の職員へのインタビューやパン販売体験を通じて将来を見据えた支援を行っている。	現在の交流機会に加え、合同イベントを実施して交流の機会を増やしてしていく。また、職員同士の交流も図り、施設の特徴を理解し合い、支援の質の向上を目指す。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	家族支援については、特にきょうだい児が参加する療育やイベントの提供の機会が少なかった。また、保護者が必要と感じる交流内容・方法の検討が十分ではなかった。	きょうだい児が参加できる行事等の機会が少なく、きょうだい児の悩みや支援の在り方について職員の認識が明確でない課題がある。保護者同士の交流の場は提供しているが、参加率の向上や、参加者同士がより交流しやすい企画の工夫が必要である。	きょうだい児支援や家族支援の方法を見直し、職員向けの勉強会を実施しながら新たなイベントの企画・考案を行う。また、お迎え時などに、保護者やきょうだいへ積極的に声かけをし、職員との交流機会をつくる。
2	地域との交流の機会は少しずつ提供しているが、児童クラブや地域の児童との交流機会の確保が十分ではない。	交流を希望される方とそうでない方がいらっしゃる中で、交流機会の確保については難しい面がある。	地域交流については、こどもや保護者に参加の意向を確認したうえで、まずは同法人内の施設間交流や近隣の放課後等デイサービスとの交流機会を検討する。さらに、地域の人々を招待するイベントを毎年開催しており、その告知を強化することで、より多くの人々に参加してもらい交流できる機会とする。
3	同施設内に児童発達支援事業所があり、午前と午後で部屋を分けて使用しているため、長期休暇や学校の早帰り時には、十分なスペースを確保することが難しい時がある。	使用していない部屋などを、計画的、効率的に使用する工夫が必要。活動計画や準備、打合せなどの時間が十分にとれず、スペースを上手く使えていないことがある。	スペースの確保については、職員間でアイデアを出し合い、今ある空間を計画的かつ有効に活用できるようにする。通常時の療育では、部屋の確保はできているが、活動内容やこどもの様子に合わせたスペースの確保が十分でない時がある。地域の社会資源を活用するなど、近隣施設の空きスペース等を活用し適切な環境で活動が行えるよう工夫をしていく。